（様式３号）

学 位 論 文 の 要 旨

氏名　　桂　春作

〔題名〕

Duration of Prophylaxis against Venous Thromboembolism with Low Molecular Weight Heparin (Enoxaparin) after Surgery for Abdominal and Esophageal Cancer: A Single Institution, Prospective, Randomized Trial in Japan

（腹部悪性腫瘍手術後における静脈血栓塞栓症（Venous Thromboembolism: VTE）予防に対する低分子ヘパリン（Enoxaparin）投与期間の検討）

〔要旨〕

【目的】術後静脈血栓塞栓症（venous thromboembolism: VTE）予防に対する抗凝固薬の使用期間に関しては、本邦では明確なエビデンスが存在しない。そこで腹部悪性腫瘍手術後VTE予防に対する低分子ヘパリン（enoxaparin）の投与期間を探索することを目的とした。

【対象】腹部悪性腫瘍手術（食道癌を含む）を受ける40歳以上で術前VTEを認めない症例を対象とした。

【方法】短期（術後3日間）投与群と、長期（術後10日間）投与群にランダム化し、術後11日目以降、退院までに下肢静脈エコーを行いVTEの発生率を評価した。全症例に弾性ストッキング・術中間欠的空気圧迫法(intermittent pneumatic compression: IPC)を併用した。

【結果】短期投与群45例、長期投与群45例が対象となった。エノキサパリン投与との関連が否定できない出血事象を2例（2.0%）に認めた。無症候性の末梢型深部静脈血栓症(deep vein thrombosis: DVT)を短期投与群3例（6.7%）、長期投与群4例（8.9%）に認めたが、投与期間によるDVT発生率に有意差はなかった（p=0.50）。両群ともに中枢型 DVTおよび肺血栓塞栓症(pulmonary thromboembolism: PTE)の発症を認めず、退院後経過観察期間に出血などの合併症を認めた症例はなかった。

【結論】腹部悪性腫瘍手術術後におけるVTE予防に対するエノキサパリンの投与期間は、弾性ストッキング・術中IPCと併用すれば3日間投与で十分である。

（様式９号）

学位論文審査の結果の要旨

報告番号	乙 第 1076 号	氏　名	桂 春作
論文審査担当者	主査教授 矢野雅文		
	副査教授 白澤文吾		
	副査教授 濱野公一		

学位論文題目名（題目名が英文の場合、行を変えて和訳を括弧書きで記載する。）

Duration of Prophylaxis against Venous Thromboembolism with Low Molecular Weight Heparin (Enoxaparin) after Surgery for Abdominal and Esophageal Cancer: A Single Institution, Prospective, Randomized Trial in Japan

（腹部悪性腫瘍手術後における静脈血栓塞栓症（Venous Thromboembolism: VTE）予防に対する低分子ヘパリン（Enoxaparin）投与期間の検討）

学位論文の関連論文題目名（題目名が英文の場合、行を変えて和訳を括弧書きで記載する。）

Duration of Prophylaxis against Venous Thromboembolism with Low Molecular Weight Heparin (Enoxaparin) after Surgery for Abdominal and Esophageal Cancer: A Single Institution, Prospective, Randomized Trial in Japan

（腹部悪性腫瘍手術後における静脈血栓塞栓症（Venous Thromboembolism: VTE）予防に対する低分子ヘパリン（Enoxaparin）投与期間の検討）

掲載雑誌名 The Bulletin of the Yamaguchi Medical School

第62巻　第3-4号　P.　～　（2015年 12 月 掲載・掲載予定）

（論文審査の要旨）

【目的】術後静脈血栓塞栓症（venous thromboembolism: VTE）予防に対する抗凝固薬の使用期間に関しては、本邦では明確なエビデンスが存在しない。そこで腹部悪性腫瘍手術後VTE予防に対する低分子ヘパリン(Enoxaparin)の投与期間を探索することを目的とした。

【対象】腹部悪性腫瘍手術（食道癌を含む）を受ける40歳以上で術前VTEを認めない症例を対象とした。

【方法】短期（術後3日間）投与群と、長期（術後10日間）投与群にランダム化し、術後11日目以降、退院までに下肢静脈エコーを行い VTE の発生率を評価した。全症例に弾性ストッキング・術中間欠的空気圧迫法(intermittent pneumatic compression: IPC)を併用した。

【結果】短期投与群45例、長期投与群45例が対象となった。エノキサパリン投与との関連が否定できない出血事象を2例（2.0%）に認めた。無症候性の末梢型深部静脈血栓症(deep vein thrombosis: DVT)を短期投与群3例（6.7%）、長期投与群4例（8.9%）に認めたが、投与期間によるDVT発生率に有意差はなかった（p=0.50）。両群ともに中枢型DVTおよび肺血栓塞栓症(pulmonary thromboembolism: PTE)の発症を認めず、退院後経過観察期間に出血などの合併症を認めた症例はなかった。

【結論】腹部悪性腫瘍手術術後における VTE 予防に対するエノキサパリンの投与期間は、弾性ストッキング・術中IPCと併用すれば3日間投与で十分である。

本研究は、腹部悪性腫瘍手術術後におけるVTE予防に対するエノキサパリンの適正な投与期間を検討し、明らかにした論文である。よって、学位論文として価値あるものと認められた。